

3世代を紡ぐ 元帰塾

キャストはりま塾に参加して

神吉 恵

キャストはりま塾生として、播磨町ため池コミュニティ会議に3年間参加しました。分科会では水利組合や自治会の人たちと、池についての思いや意見を交わしました。

1年目の分科会では、「池は危ない」と言われてフェンスで周りを囲んでもすぐに穴を作ってしまう…。

2年目「池は危ないかもしれないが、周りを囲うだけでなく、自己管理できるようにしたら…。」

3年目の今年は、「どうしたら昔のように池と親しむことができるだろう。」といった意見が交わされました。そして、狐狸ヶ池、妹池にコミュニティが始められようとしています。

3月には“河辺いきものの森”への視察研修に行きました。ここは二つの川の三角州で上流から流れてきた多くの種類の木が育つ平地林でした。住宅地として開発が進む中、「昔からの緑を残したい！」人たちの熱意で、残し守られた森。森の管理は、行政と住民ボランティアの協働による理想的な運営に見えました。

ゆめ塾連絡会で開いた、小学生の“子ども夢フェスタ”では、動物のいる公園、遊べる海、魚のいる川、緑豊かな森……など、多くの子どもが自然豊かなまちを夢に見ています。

「水に親しめる池、川、海、小動物のすむ森」山のない播磨町にも、平地林なら造れるかもしれません。それらの池、川、海、森に行くために、自動車ではなく、ベビーカー、シルバーカー、車椅子、歩行、自転車で行きたくなる安全で楽しい道ができたならどんなに素敵なことでしょう。

そんな“まちづくり”を目指して、次年度もキャストはりま塾で仲間と話し合っていきます。

『水辺で自然と遊ぶ』

三村 隆史

10月30日(土)、小雨のパラつく中、喜瀬川に入って魚を追ったり、竹筒で水を飛ばす子

どもたち。

ため池ウォーキングと喜瀬川遊 ing の参加者は、ため池をめぐり、野鳥観察や鯉に触ったり、水質を調べながら、であい公園に到着しました。

ボランティアと塾生が協力して、石ころペイントや焼いもも楽しんでもらいました。親子の参加者も多く、お父さんやお母さんから昔の遊びなどを話してもらっている子ども達。地域の資源を生かす仕掛けがあれば、いっぱい楽しめることを確認した一日でした。

塾からの提言

住民の立場から広くまちづくりに関心を持ってもらう「しかけ」をデザインするために、次のような取り組みを提案します。

- ① 新しい「豊かさ」の価値を創出し、相互扶助のあたたかな心を交流させるために、さらにはコミュニティの活性化を図る仕掛けとして地域通貨「LETS阿閉」の流通実験を行う。
- ② 地域資源の「ため池」に広く関心を持っていただくために、新井用水路をたどるエコ・ツーリズムを企画する。
- ③ 北池をはじめ、具体的な形になりつつある「ため池コミュニティ協議会」の設立をサポートしていきたい。
- ④ 播磨町らしいガーデニングを啓発するために、コンテナガーデンフォトコンテストを開催する。
- ⑤ 北池の緑地を、野鳥が集う、自然豊かな「平地林」として再生させたい。

3世代を紡ぐということ



塾長 長尾 禎則

親があって、その子供がいて、成長してその子供に、子供が出来る。そのそれぞれの世代が一緒に生活する

ことが、人間の世界では自然な形ではないかと思っている。つまり、先代から受け継がれた人としての行儀、作法、食事のこと、約束事、その他、生きていくための所作が自然の中で培われて成人になるとともに巣立ち、社会人として一人前であることを証明してもらえる、昔はそうであった。

今回3世代を紡ぐというテーマで、紡ぐためのいろいろなイベントを企画した。

①歌い継いでほしいもの

(童謡唱歌、昔の名曲、流行歌)

②作り継いでほしいもの

(竹とんぼ「肥後守を使って」、紙ヒコーキ)

③食べ継いでほしいもの

(ちゃぶ台的食事風景、一家団欒)

④語り継いでほしいもの

(行儀、作法、ことわざ、故事)

結果として

①の場合、平成16年4月2日(金)午前10時より、NHKうたのお姉さん、田中久美子、美也子さんを迎えて、3世代楽しめる童謡コンサートを開いたところ、中央公民館大ホールが親子連れで超満員となった、一家族500円という有料であったのに…これを基に考えた企画であったが、盛会といえるのは、10月10日(日)ふれあいカラオケと、2月27日(日)の今昔童謡コンサートのみであった。しかし、残念ながら、音楽で紡ぐことはむずかしいと思った。

②の場合、紙ヒコーキと竹とんぼ作りについてはある程度確信はあった。実際やってみると想像以上に反応があり、今の子供達がいかに、刃物を使った手作りに憧れているかが良く分かった。刃物を使ってモノを作ることは、誤って手指を傷つけることも同時に考えられるが、しかし、それはわずかな授業料として、貴重な体験である。痛みの分かる人として育つからである。この重要な体験から逃げる今の教育現場は、いかがなものか、個人的には疑問を感じる思いである。

③の場合、ちゃぶ台と言え懐かしい食事風景が思い浮かぶと思うが、ちゃぶ台的(?)食事風景が現代では消えて家族(核家族)全員が食卓を囲んで朝ごはん、晩ごはんを食べる機会がめっきり減り、家族のコミュニケーションが希薄になっている。個々の生活環境の相違から起こる現象ではあろうが悲しい現実である。核家族でありながら家族の中の核が見えない、せめて、核の存在を認識する機会がほしい。

④の場合、行儀、作法、具体的に言えば言葉使い、食事の際の箸使い(箸の持ち方)、ことわざの語り継ぎ、漢字を含めた、国語力の充実等、教育現場だけではなく、家庭の中でも折にふれては漢字の話題を持ったり、ことわざカレンダーを吊り下げて、理解を深めたり、日常の中に人間教育を持ち続けたい。

元帰塾に参加して

三上 年一

「もう、出来たと思いますので、ボツボツ、肥後守(ナイフ)を返してください」…「二丁たりないよ、誰が返してないのかな、」若いお母さんが一生けんめい竹とんぼの最後の仕上げに入ってる、そばで心配そうに子供ののぞき込んでいる、「出来た」とお母さん、「出来た」と子供、二人のうれしそうな声。まだ一丁足りない、見ると隅のほうで必死に竹とんぼを削っているお母さん、子供をそっちのけではまり込んでいる、「出来ましたか」「もうちょっと、私ひとつの事やり出したら熱中する性質で」とにっこり笑って言いました。さわやかないい顔でした。下は幼稚園児から小学校高学年まで、親子で、竹とんぼ、紙飛行機、スナッグゴルフ(新スポーツ)をシーサイドドームで、11月に3世代参加で行なった時のことです、子供達は肥後守の使い方はまったくダメでしたが、やりだすと一生懸命でとても楽しそうでした。一緒に来た若いお父さん、お母さんも、始めは子供の使う肥後守に心配そうでしたが、親子で一つの物を仕上げるという目的に向かっていく姿は大変感動的なものでした。

また、親子ペアでのスナッグゴルフ大会は、親子が交互にクラブとパターでボールを打って目的のところへボールを付ける競技です。親が打って、次に子供が打つ番ですが、なかなかボールが前に行かない子供、後が追いかけて来ているので気が気でないお母さん、「早く早く」とせかすのでよけいに打てない、子供がうまく打てないと、手を添えようとするお父さん、「1人でやるー」と大きな声でがんばる子供、日頃のその家庭を垣間見たような気がする。しかし、何にでも一生懸命取り組む子供達を見ているとなんとも言えないさわやかで良い気持ちだ、私達まで晴れ晴れと

した気持ちになれる、ボランティアに参加して本当によかったと思いました。

3月13日(日)には、中央公民館で、播磨町子供夢フェスティバルが開かれました。80人近い子供達が、各班に分かれて、最初のボール遊びはまだ硬くなっていた子供達、盛り上げようと校長先生まで輪の中に入って一緒にゲームを。しかし、○×ゲームのころからは俄然乗ってきた子供達、各グループで自分達の夢を自由に書くと言う時間では、大変感動的なものでした。何の申し合わせも制約もなしで各班が書いているのに、書かれた事はとても似通っているのに驚きました。山、川、海、公園、遊園地、鉄道。家の中の絵や文章を書いた子供は一人もおりませんでした。子供達は広い青々とした野原や山や川や海で思い切り遊びたいと言う願望があるのかなあ、たまには大人が押し付けず、公園をひとつ借り切って自由に遊ばしてやったらどんなに喜ぶだろう、その上、少々公園のものを壊しても、掘っても、いいよといえば…。

今、愛、地球博が名古屋で開かれています、バスで行こうかと言えば、「おお、行こう」と子供達は即座に答えると思います。朝4時の出発でも、夜帰りが遅くなっても、学校1日休んでも「行くぞー」と答えそうな気がする。将来の日本を託す、たくましい子供になってほしい、そのためには手伝いはするが、押し付けにならない、過保護にならない子供達へのボランティアを考えなければならぬと思いました。

「3世代を紡ぐ 元帰塾」 平成16年 活動報告書



4月2日（金）10:00～11:00
3世代で楽しめる童謡コンサート

NHKうたのお姉さん田中久美子さん
妹さん田中美也子さんを迎えて、ご覧の通り
超満員でした。
(播磨町中央公民館大ホールにて)



NHKうたのお姉さん田中久美子さん
妹さん田中美也子さんを迎えて、記念写真
(播磨町中央公民館ロビーにて)



5月6日（日）
赤穂海浜公園内の塩の国にて、塩作りにチャ
レンジする。
約30分で完成した。
貴重な体験でした。
小学生も11名参加してくれて楽しい1日
でした。
赤穂資料館で昔の道具をいろいろ見学して充
実した1日でした。
(塩作りの様子)

神 戸 新 聞

ご存じですか？肺の難病「LAM」

加古川の患者・今井さん

音楽会で支援訴え

あす 主催団体の要請受け
播磨町

肺の機能が低下し、進行すれば呼吸不全になる難病「肺リンパ脈管腫瘍症（LAM）」について知ってもらおうと、加古川市の女性患者が二十二日、加古郡播磨町で開かれる臓器移植提供意思表示カード（ドナーカード）の普及コンサートに出演する。

（今泉欣也）

今井友世さん（左）同 市野口町二丁目。市野口町二丁目。地方の博物館で学芸員だった昨年三月、突然背中が痛むようになった。LAMと診断された。

LAMは気道や肺血管の周りで細胞が異常に増殖し、肺の機能を侵す病気。若い女性に発症例が多い。罹患された国内の患者数は百数十人。有効な治療法は肺移植しかない。

今井さんによると、米国のレベルでの研究が進み、患者の家族が財団を立ち上げるなど支援の動きが広がっているが、日本ではほとんど知られておらず、女性特有の病気という点で偏見もあるという。

「LAMのことを多くの人に知ってもらいたい」と話す今井さん。加古郡播磨町東本荘一、町中央公民館

「3世代で楽しめるのこのリレーカード普及コンサート」は午後一時半、同町中央公民館で開演。東播磨を中心に活躍する音楽家たちがクラシック、童謡などを演奏する。今井さんはコンサート中盤、ステージから聴衆に呼びかける。

参加費は三世代、親子で五百円。問い合わせは「3世代で楽しめるのこのリレーカード普及コンサート事務局」078・942・3338

「難病LAM知り理解を」 今井さん コンサートで訴え

肺の難病「肺リンパ脈管腫瘍症（LAM）」の患者で、加古川市在住の今井友世さんがこのほど、播磨町中央公民館で開かれた「ドナーカード」の普及コンサートに出演し、聴衆を前に約半時間、聴衆に語りかけた。

LAMは、細胞の異常増殖などで肺機能が低下する女性特有の病気。発症後十年で半数以上の患者が亡くなっており、現時点での治療法は肺移植しかないという。

コンサートは、臓器移植提供意思表示カード（ドナーカード）の普及を目的として開かれた。地元音楽家たちの演奏に続き、今井さんが登場。「昔多いといい、現在は「家族や悪人など支えてくれる人たちのためにも、絶対死んだらあかん」と思っている。難しい問題だが、移植について考えるきっかけになればうれしい」と話した。大きな拍手を浴びた。

（今泉欣也）

今井さんが登場、「昔多いといい、現在は「家族や悪人など支えてくれる人たちのためにも、絶対死んだらあかん」と思っている。難しい問題だが、移植について考えるきっかけになればうれしい」と話した。大きな拍手を浴びた。

（今泉欣也）

3世代で楽しめる
命のリレーカード普及
コンサート

最高に嬉しかったことは、
このコンサートの前日と翌日に、
新聞報道されたことでした。



7月11日（日）
ちゃぶ台文化（おばあちゃんの台所）
朝ごはんの部

昔のちゃぶ台での朝食の準備中
（中央公民館、料理教室）



7月11日（日）
朝食が完成して

実際に使用されていた50年前の、ちゃぶ台
に朝食を載せて、その時代の雰囲気味わう。
（中央公民館、和室）



10月10日（日）
第1回カラオケのど自慢

なかなか盛会でした
ちびっ子も楽しく歌ってくれました。
（中央公民館、大ホール）



11月7日（日）
手風琴（アコーディオン）のグループ

「アルデンテ手風琴アンサンブル」を招いて
盛大なコンサート
童謡から世界の名曲、昭和のナツメロ、その
他
「笛吹けど兵踊らず…」



11月23日（祝）
播磨町シーサイドドームにて
「シーサイドフェスティバル」

肥後守を使った、竹とんぼ作り、紙ヒコーキ
作り。
作った竹とんぼで競技、
続いて紙ヒコーキ飛ばし大会。



昼食の後、スナッグゴルフ講習会。
そのあとコースを回って大会。
初めての経験であるにもかかわらず、親も子
もみんな楽しく、一生懸命にプレーをしまし
た。



12月26日 (日)

ちゃぶ台文化の行事として親子で年越しそばを作ることにチャレンジしました。
この様子は翌日の神戸新聞に載りました。
(中央公民館、料理教室)



平成17年2月27日 (日)
播磨町健康生き生きセンター (3F)
童謡今昔コンサート

ご覧のとおり満員の中で童謡今昔を楽しみました。
しかし、残念なことに子供の姿が少なかった。



平成17年3月27日 (日)
ちゃぶ台文化 (おばあちゃんの台所)
晩ごはんの部

晩ごはんはやっぱり「なべ」です。
昔の「なべ物」1.みそ鍋 (土手鍋)、2.寄せ鍋 (ざこば鍋)、3.とり鍋 (かも) の3種類をおいしく味わいました。



3世代家族ゆめ新聞 応募数 0でした



「肥後守」のよさをもっと知ってもらおうと思ったのは、この記事がきっかけでした。皆さんにも古き良き日本文化を大事にしていただけたらと思います。

肥後守ふたたび

上前淳一郎

肥後守を知っていますか。

小学校を卒業して四十年以上になる人なら、子供のころきつと筆箱かポケットに一本持っていた、刃渡り八センチほどの折り畳み式ナイフだ。

主たる用途は、教室で鉛筆を削るところにあった。

工作の時間には、木や竹を削ったり、彫ったりした。

家へ帰ると竹トンボを作り、女の子は上手に柿の皮をむいた。

『読むクスリ』子は、肥後守で杉の実鉄砲を作るのが得意だった。

細い竹を切ってきて筒にし、先に小さな杉の実を詰める。そして先端に布を巻きつけた棒を、筒に押し込んでやる。すると圧縮された筒の中の空気が、ぼん、と杉の実を勢よく飛ばすのだった。

そんなふう教室でも遊びにも子供たちが重宝した肥後守が、昭和三十年代の半ば以降、ぱったり姿を消してしまった。

「演説中だった社会党の浅沼稲次郎委員長が少年に短刀で刺殺され、婦人団体中心に刃物追放運動が盛り上がったからなんです」

と兵庫・三木市で今も細々と肥後守を作り続ける永尾駒製作所の永尾元佑さん（六十八歳）。

一九六〇（昭和三十五）年十月十二日、浅沼委員長は東京・日比谷公会堂の演壇で、十七歳の右翼少年に刺殺された。

その前から婦人団体などの間に、「子供に刃物を持たせるのは危険」

という声があったように記憶している。

それが、このテロ事件でいっぺんに大きくなった。

どんな刃物でも子供が持つのは悪、ということになり、肥後守も取り上げられてしまった。

代わって学校にも家庭にも備え付けられたのが、あの音ばかりうるさい鉛筆削り器だった。「それで私たちには仕事がなくなりました。市内に四、五十軒あった肥後守作りの業者がばたばた倒産し、残ったのは私のところだけになってしもうて」

三木は江戸時代から、ノコギリ、カンナ、ノミなど大工道具を作る金物の町として知られていた。「折り畳み式の肥後守はね、明治時代の中ごろに、この町で初めて考案されたものなんです」

それで当時は、製造地の名を冠して発売されていたが、九州地方、とりわけ熊本、つまり肥後でよく売れたので、鉄（あるいは真鍮）製の柄に『肥後守』の銘を入れたものを作った。「それが熊本の人に喜ばれてね、ますます売れる。その人気九州から全国に広がったもんだから、三木で作られる折り畳み式ナイフ全部に肥後守の銘を入れることになったんです」

日本刀の焼き入れ方を使ったので切れ味もよく、肥後守は全国を席卷して、大人も子供もその名を知らない者はないまでになっていく。

むろんその陰で、おびただしい偽肥後守が各地で作られることになるのだが。

さて、いわれなく“悪”の汚名を着せられて肥後守が全国の学校から消えて二十年ほど後に、これに目に付けた教育関係者がいた。「一九八三（昭和五十八）年当時の、この小学校の校長先生なんです」

と長野・池田町立会染小学校教頭の川口邦博さん（五十二歳）。

最近の小学生は手先が不器用で、雑巾が絞れない。靴ひもは結べないし、窓のカギも閉

められない。

それを日々見ているうちに校長先生は、これは大変だ、いまに日本人は指先で何もできない民族になってしまう、と危機感を抱いた。

それに、指は第二の脳、という。指が使えなければ、脳までだめになってしまうのではないだろうか。「それで校長先生は、ナイフを使わせてみよう、神経を集中して使わないと危険だから、いやでも指先が器用になる、と考えたのです」

ナイフといっても、肥後守なら折り畳んでどこへも入るから便利だし、安全だ。

それでもやはり保護者の間からは、危ない、と反対の声も出た。だが、PTAは校長先生の考えを理解し、積極的に資金集めに乗り出した。

「廃品回収で肥後守代をひねり出して下さったんです。子供たちも手伝いました」。

それから十八年。

今では毎年新生入生に、まあたらしい肥後守が一本ずつ、PTAからプレゼントされる。今年も五十一人の新一年生に贈られた。

「担任の先生が使い方と、じき鉛筆が削れるようになります。うちの学校には鉛筆削り器は一台もありません」。『ナイフに親しむ週間』というのがあって、六年生のお兄さん、お姉さんの指導で竹の耳搔き、コマ、小枝のキーホルダーなどを作る。

そうやって、ナイフの正しい使い方、研ぎ方を覚えていく。

もちろん、初めのうちは指を切る子がいる。血を流しながら、保健室へ駆け込む。「でも、それも大事なことなんです。その経験から、ナイフの使い方を誤ると怪我をする、ということをも身をもって学んでいくのです」。

上級生になると、新しく転任してきた先生がびっくりするほど肥後守の使い方が上手になり、「卒業作品として、見事な木彫りの衝立を残していつてくれたりするまでになるの

ですよ」。

兵庫の永尾さんが月に一万本ほど作る肥後守の多くは、今も九州でよく売れる。

「大工の竹細工や繊維の裁断なんかに使われとるようすな」。

学校で、という話はまず聞かない。

「学習塾で、集中力をつけるために、これで鉛筆を削らせた、という話が来たことはありますがな」。

昨年、永尾さんは会染小学校の児童たちに招待されて、長野へ行った。「子供さんたちが一人一本ずつ、鉛筆の軸を薄く肥後守で削ってね、そこへワシあてのメッセージ彫り込んで贈ってくれたんですわ。うれしかったですなあ。宝物です」

児童たちは校名入りの肥後守を一本ずつもらい、握手して、鋼職人の手のごつさに目を丸くした。

卒業生たちは中学へ進学してからも、筆箱に肥後守を入れている。

「中学校は刃物の持ち込み禁止ですが、会染小学校から来た子は別格ということになっているようです」

文部省（現在の文部科学省）から同小学校へ、「児童にナイフを持たせるのは、少し考えてもらいたい」という意味の圧力がかかってきたことがある。

しかし先生たちは、これはもう本校の伝統だから、とやめなかった。

「在校生、卒業生を通じてこの十八年間、肥後守で他人に怪我をさせたような不祥事一度もありません。正しい使い方が身につければ、そんなことは決して起きないのですよ」

名前の由来 肥後守

◆お問合せ/永尾駒製作所... ☎0794-82-1566

今回は、中高年の人なら一度は使ったことのある肥後守をご紹介します。肥後守のルーツは歴史が長く、様々あります。明治26〜27年頃三木市の平田町で作られたので始めは平田ナイフと言う名でスタートしたそうです。明治37年頃尾松三郎氏が鹿児島から持ち帰ったナイフを元に製品を改良。当時取引先の多くが九州熊本だったことから、名前を肥後守ナイフに変えて販売したところ大ヒット。これが名前の由来の中でもっとも有力な説のようです。

ひこのかみ 肥後守の使い方

これだけは守ろう!

ナイフは、さまざまな道具のなかでも、最も基本的な働きを持っているもののひとつです。ナイフを生活の中で役立て、ナイフを使って作るよろこびを感じることができれば、お子さんの創造力がぐんぐん伸びていくでしょう。ぜひ、この夏休みを利用して、そんな創造力を、親子が協力して、伸ばしてあげてください。そして、約束もしっかり守りましょう。

安全にナイフを使うための5つのポイント

- ①ナイフは、ものを作るための道具です。ものをこわしたり、人を傷つけたりすることには、絶対に使わないこと。
- ②ナイフは、傷ついてもよい台などの上で使い、あとかたすけをきちんとすること。
- ③手を切るおそれのあるときは、手袋をすること。
- ④ナイフを使わないときは、かならずたたんでしまっておくこと。
- ⑤切れないナイフは、けがのもと/よく切れるように、手入れをすること。



①材料の切断

②鍛造

③荒研磨

④さやとおける (シヤクウロウに鉄を削る)

⑤カシメ

⑥仕上げの研ぎ

⑦仕上げの研ぎ

⑧仕上げの研ぎ

⑨仕上げの研ぎ

西代目 永尾元佑

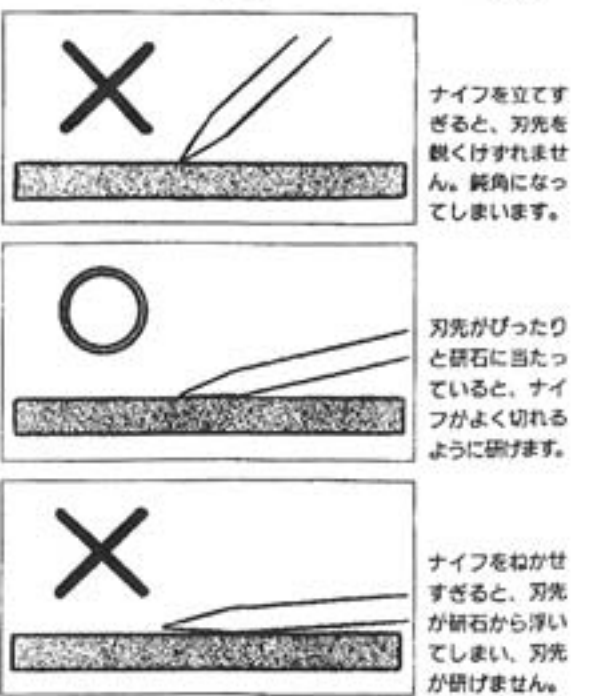
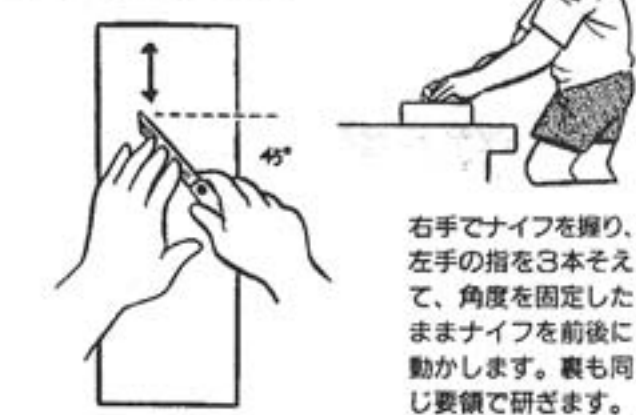
全国のナイフ等と比べて、肥後守は独特な味があります。それは、歴史が長く、作り手が愛情をこめて作っているからです。昔は肥後守のナイフは、小学校で使われていたこともありました。その昔は、物に刺さるのを怖がる子供も多かったと聞きます。でも、今は違います。子供も、ナイフを怖がらなくなりました。それは、親が、子供と一緒に、ナイフの使い方を教えるようになったからです。そして、約束もしっかり守るようになったからです。それが、肥後守のナイフが、今も愛されている理由です。

昔の人はナイフの製造の道具として使っていました。

ナイフ(鋼) 背 柄(木) カシメ 刃(鋼) 子ばね(鋼) 子ばねのふた(鋼) 肥後守(鋼)

ナイフの研ぎ方

切れなくなったら、研石で研いで手入れします。テーブルの上に置いた研石にナイフをのせ、両手で水平に動かして刃を研ぎます。



じょうずな切り方、けずり方

①細い木の先をけする

②太い木をけする

③折りたたんだ紙を切る

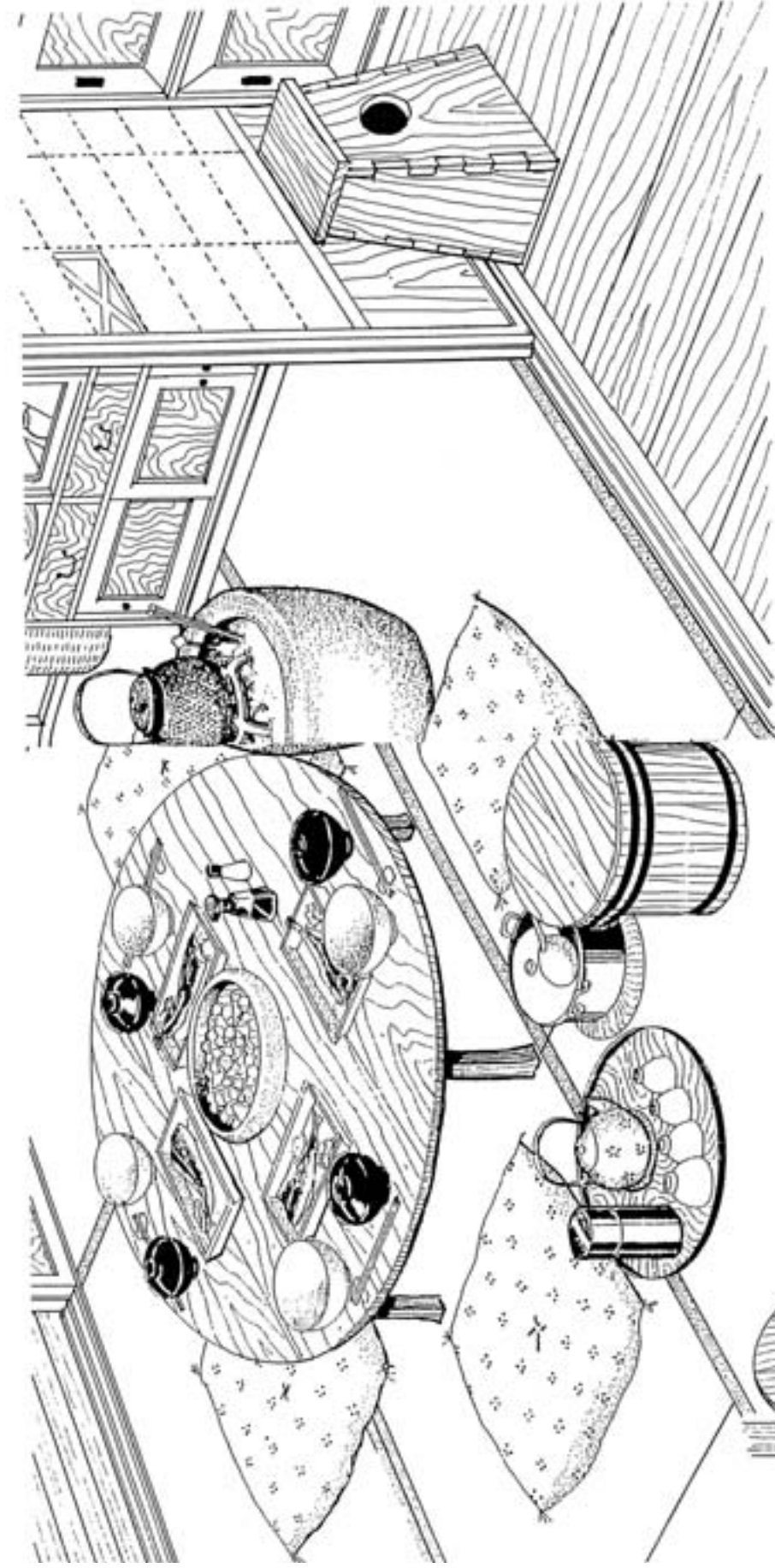
④刃先を使って紙を切る

右手にナイフを握り、親指と人差し指に力を入れて、ナイフが木にくい込む角度を決めます。木を持った手の親指をナイフに当て、その指の力で木をけずります。

けずる木の先を台の上に置き、左手で押しつけるようにおさえます。ナイフは上から下へ力強く動かします。

紙の折り目の間にナイフをはさむように入れて、ナイフを左に押しつたり右に押しつたりしながら切り進めます。折り目によって、まっすぐ切ってください。

台の上に紙を置き、よく研いだナイフの刃先を押しつけるようにしながら引いて、紙を切ります。刃先に神経を注いで、ていねいに切りましょう。



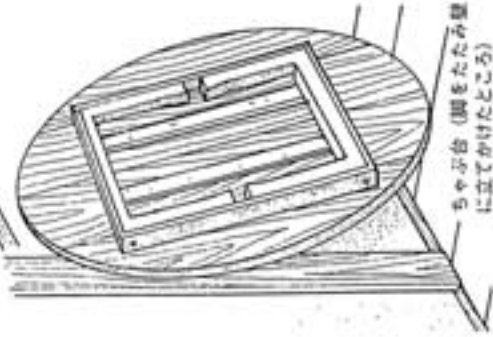
・ちやぶ台

明治時代になって、中国風・西洋風の料理がしだいに広まるのと併行して、それまで個人個人で食器・膳を用いていたのが、まず都市の一般家庭から共有共用の食卓としてのちやぶ台と呼ぶ食卓が現われ、しだいに農村におよんだ。

ちやぶ台はもともとシブク台と呼び、江戸時代末期に長崎の料理屋の食卓として用いられた。長崎にやってきた中国人の伝えた中国料理が日本化して、各自取り分けて食べる料理が広まり、それをシブク料理と呼んだ。

シブクは卓袱で、それはもと

も中国で食卓にかける被いのことである。シブク台ははじめ中国風の腰掛け式であったが、しだいに日本家屋に合わせた座式の円形食卓となり、ちやぶ台と呼ばれるようになった。そして明治のころから、四本の脚を折り畳んで収納スペースを少なくする形式のものが考案され、それがちやぶ台の一般的な形式になった。



バリアフリー塾